

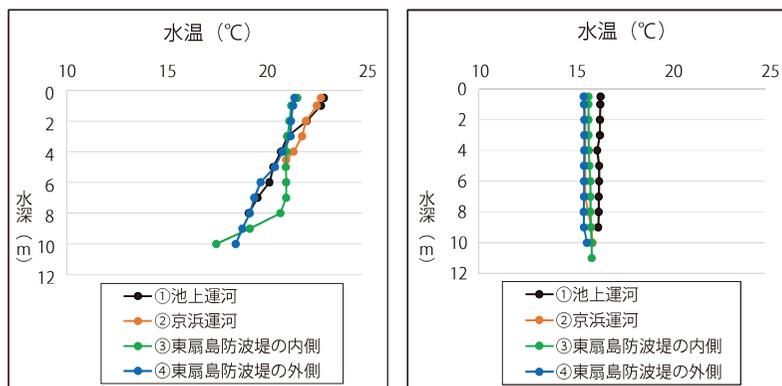
川崎港の水質

水質は生きものの生息環境に影響を及ぼします。川崎港の水質について、みてみましょう。

① 水温

左のグラフは6月（平成27年）、右のグラフは12月（平成30年）に水温を測定したものです。

6月の測定では海面から海底に向かうにつれて水温が下がり、大きいところでは海面と海底で約4度の差がみられましたが、12月の測定では海面から海底まで水温に変化がみられませんでした。



水深ごとの水温のグラフ（左：平成27年6月、右：平成30年12月）

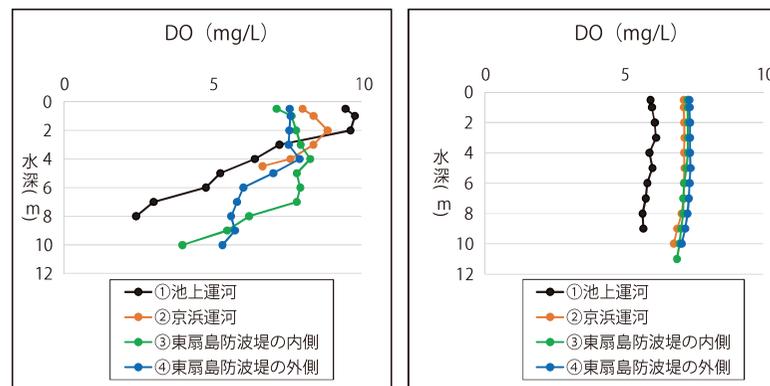
② 溶存酸素量（DO:Dissolved Oxygen）

溶存酸素量とは、水に溶けている酸素の量のことをいいます。

水中の微生物は汚れのもととなる有機物を分解するときに酸素を使います。有機物が多くなれば、微生物が使う酸素の量が増え、水に溶けている酸素の量は少なくなります。このことから、溶存酸素量は水質の汚濁（水の汚れ）を示す指標の一つとして用いられます。

左のグラフは6月（平成27年）、右のグラフは12月（平成30年）に溶存酸素量を測定したものです。

6月の測定では海面から海底に向かうにつれて溶存酸素量が低くなりましたが、12月の測定では海面から海底まで溶存酸素量に変化がみられませんでした。



水深ごとの溶存酸素量のグラフ（左：平成27年6月、右：平成30年12月）

溶存酸素量が低い状態が続くと、悪臭が発生したり、生きものに影響を与えたりすることがあります。

水温やDOは、12月の測定では、海面から海底まで同じくらいの値だけど、6月の測定では、海底にいくほど低くなっているね。
夏になって海面と海底の水温に差ができると海水の交換がされにくくなって、酸素が海底まで行き渡らなくなってしまうんだ。
酸素の量が少ないところでは生きものはすみづらそうだね。

